西洋人の神道発見

——富士山におぼえる畏敬の念について——

平川 祐弘

西洋人の神道発見については二つに分けて考えたい。

第一は学術的に日本の神道にアプローチを試みた人々である。学術的という立派に聞えるが、西洋人の高みに立つて、今から見れば高飛車な意見を述べた人々である。その何人かはかつては学問的權威のごとくに見做されたが、今日の評価はまた別であろう。明治時代に来日した西洋日本学の權威バジル・ホール・チェンバレン（一八五〇—一九三五）は一八九〇年、經典のあるキリスト教や仏教との比較において神道を次のように紹介した。

神道は、しばしば宗教と見做されることが多いが、ほとんどその名に値しない。日本で神道を愛国的な制度として維持しようとしている当局者でさえそういつている。神道にはまとまった教義もなければ、聖書經典の類もなく、道徳規範も欠いている。……人々の心を動かすには

あまりに空虚であり、あまりに實質に乏しかった。⁽¹⁾

ウィリアム・ジョージ・アストンは、一九〇五年、西洋人として初めて神道について大著をものした人である。アストンは神道を「原始的儀式」primitive cult とは考えなかつたし、また宗教を病氣と見做すような、不可知論の立場から裁断することもしなかつた。しかしそれでも巻頭でこう述べている。

世界の大宗教と比較すると日本の古いカミ信仰である神道は、その性格において決定的に初期段階の宗教である。多神教であつて、唯一の至上神は存在しない。神々の像やイメージも比較的乏しく、道徳規範も比較的欠けている。神道では神々を具体的に擬人化する度合いが弱く、靈の概念の把握もさだかでない。死後の将来の

状態を実際的には認めていない。また深い、真剣な信仰が一般的に欠如している。そうしたことをすべてを勘案すると、文献の記録がかなり残されている宗教の中でおそらく神道はもつとも未発達のままの宗教といつてよいであろう。⁽²⁾

一八七四年から八四年にかけて発表された『アーネスト・サトウ神道論』(平凡社東洋文庫、二〇〇六年)は昨年翻訳が出た。

十九世紀末当時の西洋では発展段階説や進歩史観が重んぜられた。宗教は多神教から一神教へ進歩するとみなされた。宗教学者として日本人にもよく知られたオクスフォードのマクス・ミュラーなども今から見れば甚だ単純な発達史観に囚われていた一人である。ところで右に見られる「神道には道德律を欠く」という当時の西洋の日本研究を代表するこれらイギリス日本学者の批判は、『源氏物語』には道德律を欠くという(仏教僧侶、漢学者、さらには内村鑑三などキリスト者によっても行われた)批判と、裁断の仕方において、偶然の一致ながら、通底するものがあるようにも思えるが、いかがであろうか。⁽³⁾

チェンバレンの神道観ないしは宗教観に強く反撥した同時代の西洋人は、小泉八雲の名で知られるラフカディオ・

ハーンで、彼は『生神様』の中でこう述べた。

幾千年もの長きにわたり幾百万もの人々が、こうした社の前で自分たちの先祖の偉大な死者たちを拜んできたこと、そしてこうした社の建築の中には目にこそ見えぬ意識のある者が住んでいると全国民がいまなお信じ続けていること、そうした事実を思い起せば、こうした信仰を馬鹿げたものときめつけることがいかに難しいかわかりただけだと思う。それどころか、こうした考え方に対する西洋的反撥にもかかわらず……西洋人も、神社の社頭に立てば、恭しい表敬の態度を一瞬取らざるを得なくなる。⁽⁴⁾

遠田勝は西洋人神道研究者について二つの流れがあることを指摘し「一つはサトウ、チェンバレン、アストンと続く日本アジア協会員の学術的研究であり……当時も今も欧米においては神道研究の本流とみなされている」もう一つは「ハーン、タウト、マルローという……芸術家の孤立した見方である。……ハーンは民衆の心に、タウトは建築に、マルローは絵画にそれぞれ神道の実在を感じ⁽⁵⁾したと説明した。この遠田論文は英語でも発表されており、来日する外国人学生は遠田論文に惹かれることが多い由である。⁽⁶⁾サ

トウの訳者庄田元男氏はハーンについて「いわば逆説的情緒の神道＝宗教論を展開した」と解説した。これはかなり行き渡った見方だが、ハーンはマルティニーク島での民話蒐集の体験からキリスト教化以前の土着の信仰の根深さを知り、それを日本解釈にも応用した人である。ハーンには確かにセンチメンタルな面があるが、そのような来日以前の体験を考慮にいれば、キリスト教化、西洋化、文明開化を等式で結びつけるような見方に異議を唱え、後来の宗教に先行する宗教の重要性に着目したのはいかにも合点の行くことではあるまいか。そのようなハーンをただ単に「情緒的」と貶めることはできない。ハーンの「街の音が聞こえてくるような人々の生活に親密に結ばれた」具体的な姿の神道への関心を高く評価する日本学者にフランスのベルナル・フランク（一九二七―一九九六）がいる。そのことを付言すれば、英語圏での日本学の主流派の神道観とそれ以外の国との神道観にギャップが見られることが、わかるであろう。そのことはまた英語圏の日本を見る目にプロテスタンティズム的偏向というものが交じっていることを逆に感じさせるのではあるまいか。

日本における神道の国教化を批判した論文としては、チェンバレンの『武士道―新宗教の発明』（一九二二）とD.C.Holtom, "The Political Philosophy of Modern Shinto, a

Study of the State Religion of Japan." *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. XLIX-Part II, 1922 とがあげられる。今日の西洋の神道研究はこの種の見方を強く受け、いまなおその大枠の内でも論じているものが多い。その中にはビッケン氏がいう unenlightened cynics も少なからずいる。⁽²⁵⁾

スチュアート・ビッケン教授は近著 *Shinto Meditations for Reversing the Earth* (Berkeley, California: Stone Bridge Press, 2002, p.24) で、そうした従来の神道解釈を要約して次のように述べている。

悲しむべきことに西洋人が神道について抱く最初のイメージは第二次世界大戦中に交戦国の双方で行なわれたプロバガンダによって作られた。国家神道 State Shinto とは昔の神ながらの道と区別するためにそう呼ばれたのだが、その国家神道が自然宗教としての神道を強引に奪い取って、日本の近代化の初期の明治時代から軍部主導の日本政府が大東亜共栄圏を建設しようとした太平洋戦争にいたる時期の間、神道を愛国的な役目を果たすように無理強いしたのである。米政府は神道がこのように歪められたことが日本の侵略の一因とみなし、それを「大悪」と呼んだ。国家神道は、実際のところ、その公的な

存在は七十年にも満たなかった。奇妙な話だが、それはヨーロッパの諸帝国に見られるキリスト教の伝統や感化力を真似ようとしたものであった。その試みは真面目であったが力点の置き方が間違っていた。

この最後の点に関連して一言すると、岩倉具視らの米歐回覧に随行した佐々木高行は米国で政治の要諦を次のように把握し日記に記した。

〔米国にては〕宗教にて風俗を維持し、日曜日には大統領はじめ高官みな教会に参りて説教を謹聴する所に妙味あり。我が日本の今日〔明治五年〕の如く、孔孟も馬鹿、教とするに足らず、釈迦も同断、甚だしきは〔伊勢〕大神宮を何とも思はず、耶穌は勿論異端と見、宗教を重ぜずしては風俗は維持されぬなり。

米国にては耶穌新教を信仰し、能く人情に適せり。日本にては神道を基礎とし、之を助くるに孔孟の道を以てし、孰れも人々が真面目になるやうにせぬ時は、随分我儘となり人間の務はなくなるべし。

この佐々木発言は神道を米国におけるプロテスタントイザムの地位に引き上げたいとする意図が明治政府の一部に

あったことを示唆している。しかし私は西洋が植民地化と平行してキリスト教化を試みたほど、日本には中国や東南アジアへ神道を広めようとした意図があったなどとは思わない。もちろん神社参拝の強制など行き過ぎはあった。しかし西洋人が *The Great Evil* と呼んだのは、自分たちのキリスト教世界征服史になぞらえて日本の神道をイメージしたからこそ、そのように映じたのではないかという気がしてならないのである。

カトリック側はデウスやゴッドを「天主」と訳すことで日本の神と違うことを示した。プロテスタント側は宣教の便も考えてのことであろうか、*God* を「神」と訳した。すると「現人神」は *God-Empereor* という英語に化してしまふ。戦争中、米英人キリスト教徒は、日本人は天皇を宇宙を創造して支配する全知全能の絶対者として信じている。人間である日本の天皇が「ゴッド」などと自称するのは僭越も甚だしい、と当然のことながら不快感を覚えたことであろう。そして諸悪の根源を国家神道に求めたのに相違ない。だが指導者の神格化は非常時には多くの国で行なわれてきたという面があることを忘れてはならない。また宗教が愛国のために利用されることはアメリカの大統領以下が兵士を送り出す際に *God bless America* ということによってもわかるであろう。

日本理解のきわめて低かった戦争中の西洋では、日本はなにかと同盟国ナチス・ドイツとの類推によって説明された。ナチスがゲルマン神話を利用したから、日本の『古事記』の神話もその類の役割を演じたに相違ないと思つたのであろう。西洋側の神道に対する反感はキリスト教の布教を妨げるものとしてすでに戦前からあった。それが戦中戦後さらに強められ、日本研究者の中にも根深く残っている。西洋側の神道研究者が日本側の神道学者と協力して出した神道研究に John Breen and Mark Teeuwen ed. *Shinto in History* (Curzon, 2000) があるが、私にとって興味深かったのはその著書そのものもさることながら、西洋の一部日本研究者のこの書物への書評 (*Journal of Asian Studies* など) に示した「神道アレルギー」とでも称すべきものの凄まじさであった。居丈高な書評の筆致には人種的・文化的・宗教的偏見すら感じられる時がある。以上が第一の流れである。学術的に日本の神道にアプローチを試みた人々への私の瞥見である。もとよりきわめて限られた一瞥に過ぎない。

True characteristics of Shinto are caught rather than taught といわれる。この英語は訳しにくいが、神道の特質は教えられてわかるというよりは合点された時にわかる、とでも訳せばよいだろうか。ということは理詰の学術的アプローチとは異なるアプローチがあるいはより有効である

場合があるのかもしれない。そのような私がより深い関心を寄せるの先の分類の第二の流れの方である。西洋人芸術家の見方をチェックしてみたい。限られた紙面であるから富士山に対しておぼえる神道的感情に焦点をしばることとする。

富士山に心動かされる気持が神道的感情だと自覚している日本人はどの程度なのだろうか。美しいから心動かされるのだと理解している人が多い。しかし日本人には景観信仰⁽⁹⁾があるといわれれば、富士山の場合もそうだと合点する人がいる。そしてその信仰はどうやら神道らしいと納得するようである。そのように人に説明されて「自分が富士山に対しておぼえる気持は神道なのか」とようやく自覚したりする。逆説的なことを述べるようだが、日本人における宗教性の深さは、そういわれて初めて気づく人が出ることからもわかるように、神道的自覚は多くの人の無意識の中に眠っていることにあるのではあるまいか⁽¹⁰⁾。

私自身はこんなことを思い出す。一九四五年の秋、一面の焼野原となった東京のはるか西に、夕方、富士山が見えたら。中学校に通っていたが、当時小田急は代々木上原に停まらない。それで京王線の幡ヶ谷駅から渋谷区西原の家まで歩いて帰った。駅からお邸街の代々木西原まで五月二十五日の空襲ですっかり焼野原となった。その西の地平線に

富士山が見えた。敗戦後のその光景は中学二年生の臉に深く印象され、いまでも思い浮べることができる。

それから年をとり内外の人に神道について説明を求められた際、いや、自分自身に対して自分の宗教を説明しようとする際、霊峰を見て覚える感動が神道の感情なのだ、という気持がいつしか強くなった。神道は日本に固有だといわれるが、ニュー・メキシコのタオスなどへ行くとプエロ・インディアンも霊峰を崇拜しているらしい。日本の自然神道は世界にかなり普遍的にあるアニミズムなのだろう。山にかぎらず滝や嵐や樹木や岩や泉や太陽に神性を認める心根である。

それではその宗教的感性は日本語ではどう表現されてきたか。内藤鳴雪の「元日や一系の天子不二の山」はおめでたいお屠蘇気分をたたえた俳句だが、その種の気分が神道の感情を要約しているのではないだろうか。元日は万物のよみがえる新年である。子供のころお正月の朝というのは真に特別の気分だった。その天地とともにきわまりない命の連続性の象徴が一系の天子様ではないか。そしてそれを視覚的にまざまざと感得させるのが元日の朝日に映える富士の山なのだ。松山の人鳴雪は二十歳年下の子規に俳句を学んだ。一八四七年に生れ一九二六年に亡くなった。幕末・明治・大正に生きたから天子様への崇敬の感情が出ている

のかというところ、それだけではなくて、そのよって来る感情の底流はもつと深いらしい。

そのような感動が日本民族にいかにも深く根ざしているかは、八世紀はじめ山部赤人が『万葉集』巻三で富士山を長歌(371)に歌っていることから察せられる。

天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる
布士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影
も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはば
かり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行
かむ 不尽の高嶺は

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける

反歌(38)がつけられ、その歌はやや異なる形で『百人一首』にも収められ、雪をいたたく富士山の姿は日本人の集団的記憶の中に留められた。富士山は単なる山ではない。「不尽の高嶺は 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消ちつつ 言ひもえず 名づけも知らず 霊しくも います神かも」(39)すなわち神様がいます山と赤人は次の長歌で歌った。しかもそ

の富士山にいます神は「日本の本の大和の国の鎮とも座す神かも」(316)と天平の昔から赤人によっても歌われた。日本人は富士山に宗教的な尊崇の念を抱き続けてきたのである。

ところで明治の開国後、西洋産業社会の偉大に圧倒された日本人は、負けん気もあって、富士山を誇りにした。志賀重昂とか内村鑑三とか外国にさらされた日本人が逆に日本の山岳風景に価値を認め顕彰し出した。東海道線の開通にともない富士山に対するお国自慢は庶民の間でも一段とひろまったに相違ない。『三四郎』一で広田先生が「あれが日本一の名物だ。あれより外に自慢するものは何もない。所が其富士山は天然自然に昔からあつたものなんだから仕方がない。我々が拵へたものぢやない」と言ったのは、漱石が日本人一般の空虚なお国自慢を冷やかさずにはいられなかつたからであろう。漱石は *der Staat als Kunstwerk* と考えて、自然存在以上の人間の自覚的努力工夫に価値を認めたのである。

では来日西洋人はどのように反応したか。Fuji Yama, *Geisha* という卑俗な並べ方からは富士山の靈性に対する敬意は感じられない。しかし日本人の場合にも富士山に対する感じ方に非常な落差がある。そのことは富士学会などでの発表者の態度にも露骨に感じられる。第二次大戦に際

して戦意高揚のために利用されたとか戦後も米軍や自衛隊の演習地として山麓が利用されているとか、そうした点にだけ目の行く人もいる。外国人にも日本人が富士の靈性を話題とすることを貶しめる人がいる。しかもそれに和して富士山は雲表の上に突き出ているから米国の爆撃機の日本爆撃の東京空襲の際の絶好の道しるべになった、とイスラエルの学者がコメントして一同が笑った時、私はいやな気が持たした。一九八二年のシカゴのアジア学会の席であつたかに記憶している。外国にもギリシャ正教の靈峰はアトスなどもあることだから、唯物論的立場やアニミズム否定の一神論的立場で靈峰の存在を否定することなく、靈峰の比較研究でもしたいものだ、と思つた。

靈峰と感ずるか否かは山を見る人の主観的反應であつて山それ自体が内に秘めている特性ではないのかもしれない。しかし靈峰という神性は感じないにせよ富士山を仰ぎ見えずばらしいと感じる人は内外に多い。富士山の観光価値が高いことは日本の切手に富士山がデザインされることの頻度からも明らかだろう。来日外国人も富士山をしばしば報じた。ラフカディオ・ハーンも一八九〇年、明治二十三年四月四日、太平洋を横切つて相模湾に入り横浜に入港した。その時の印象をこう書いている。

……早暁、甲板に出る。天気は晴、寒く、依然として烈風が吹き荒んでいる。右舷の方角に、黒々とした山脈が現れ、背景は見事なばら色の朝焼である。左舷の側にもいまや別の山脈がありこの方が右側のよりもいっそう近い。と、快い驚きの衝撃とともに、それとなく目で探していたものが見えてきた——これまでの期待を遥かに越えて——しかし水色の朝空を背に幻のごとく夢のごとく白い姿であったので、最初見たときはそれに気づかなかった。一切の形あるものを越えたところに、雪を頂いたこの上なく優美な山容——富士山だった。裾の方は遠景と同じ色で識別できず——ただ頂きの全容があえかな薄膜のように空に懸かっている——幻影と見まごうほどに。

しかし、さし昇る朝日の光につれて山の輪郭がはつきりしてくる。まず、しみ一つない頂きの部分が不思議な花の蕾の先端のように淡紅色に染まり、それから一面金色の混った白色となる——やがて頂きから真直ぐ下へ延びる線が見えてくる——雨が急流となつて流れ下つた痕である。山全体が朝の光に包まれている——その下のくつきりと青い山脈がまだ一向に夜の眠りから醒めぬというのに。しかし日射しの明るさの中にあつてさえ、その美しさは依然として霊的な清らかさと——妖しいまで

の繊細さを失わない——その輪郭あるがゆえによりやく眼は、この山を形作っているのは白い霜の蒸気——なにか淡い雲のようなものではないと納得がゆくのである。私たちはその息を呑むばかりの美しさに恍惚となつて見とれている。⁽¹⁾……

スケッチ風の描写には即席で記録した人の臨場感が漂つていて、ほとんど日記のように読める。ハーンは長い筒状の望遠鏡でアビシニア号の船上から、意外に高い空のただ中にそびえる富士の上半身をじつと仰いだ。それは原英文でも仙北谷晃一訳文でも文字による秀抜な色彩描写である。しかしこれだけだと西洋人観光客の富士山描写の一例に留まつてしまふ。

だがハーンは日本解釈者として抜群の人である。来日当初、印象主義のタッチで富士山の外面をこのように描いた人が、その六年後の一八九六年、『ある保守主義者』⁽²⁾ *Conservative* を *Kokoro* に発表し、富士山の内面の意味をもあわせて描いた。長い洋行の歳月の後、盲目的な西洋一辺倒を排し、伝統的日本の諸価値を重んずる人として、一日本知識人が祖国へ回帰して来る。地方の城下町で武士の家に生れ、旧来の道徳で育つた少年が、維新の動乱期に英語を習い、横浜に出て宣教師の感化で一旦はキリスト教に

入信するが、後に転向し、西洋に留学する。その記述にはとくに性格づけや個性化は行なわれていない。ところがその最終の第九節でハーンの筆は俄然赫突たる光彩を發する。平川訳を示すが、外国で長く苦勞した、明治の反政府側の一自由思想家だった人が、いま祖国と和解して、横浜港をさして帰つて来る。

それは一点の雲もない四月のある朝、日の出のすこし前であった。暁闇の透明な大氣を通して彼はふたたび故国の山々を見た、——彼方遠くの高く尖つた山脈は、インク色をした海のひろがりの中から、黒く董色をして聳え立っていた。流浪の旅からいま母国へ彼を送り届けようとする汽船の背後では、水平線はゆっくり薔薇色の焔で満たされつつあった。甲板にはもう何人かの外人船客が出て、こよなく美しいといわれる太平洋から望む富士山の第一景を眺めようと心待ちにしていた。朝明けに見る富士山の第一景は今生でも、また来世でも、忘れることのできぬ光景であるという。皆は長く続く山脈をじつと見つめていた。そして深い夜の中から峨々たる山岳の輪郭がおぼろげに見える上のあたりをじつと見まもっていた。そのあたりでは星がまだかすかに燃えていた。しかしそれでも富士山はまだ見えなかった。

「ああ」

と皆に訊かれた高級船員が微笑して答えた。

「皆さんは下の方ばかり見過ぎますよ。もつと上を、もつとずつと上を御覽なさい」

そこで皆は上を、ずつと、ずつと上の、天の中心の方を見あげた。すると力強い山頂が、いま明けなんとする日の光の赤らみの中で、まるで不可思議な夢幻の蓮の花の蕾のように、紅に染まっているのが見えた。その光景を見た時、皆は心打たれてひとしくおし黙った。たちまち永遠の雪は黄色から黄金へとすばやく色を變じ、太陽の光線がその山頂に達するやさらに白色に變じた。日の光は地球の曲線の上を横切り、影深い山脈の上を横切り、また星々の上をも横切って来たかのようにであった。というのも巨大な富士の裾野は依然として見えないままであったからである。そして夜はすっかり逃げ去った。おだやかな青い光が天空をことごとく浸すと、さまざまな色彩も眠りから目覚めた。凝視する船客の眼前に光に満ちた横浜湾が開けた。聖なる富士の高嶺は、限りない日の光の穹窿の中天にかかつて、その裾野は依然として目に見えぬまま、まるで白雪の霊のごとくであった。流浪の旅から帰つて来たその人の耳には、「ああ、皆さんは下の方ばかり見過ぎますよ。もつと上を、もつと

ずっと上を御覧なさい」という言葉が響き続けた。そしてその言葉は、彼の胸中に湧きあがる抗らいがたい、大いなる無限の感動と、いつか茫洋たるリズムをあわせた。するとすべてがぼーっとにじんだ。もう空高くの富士の山も、霧がはれるにつれて青から緑に色を変じつつちかづいてきた手前の岡や小山も、湾中で混みあっている大の舟も、また近代日本の一切の事物も、彼の眼には見えなくなった。⁽¹²⁾

そしてその時彼の心に見えたもの、それは古き日本だった。西洋に新を求めた彼が一度は忘れようとつとめたもの、一旦は捨て去ったものの面影がよみがえってくる。ハーンはまことに印象深く富士山を描いた。『ある保守主義者』の最終節では富士山が日本人に対して持つ精神史的意味をもはつきりと示したからである。私はこれを西洋人による神道世界の発見の一つにかぞえたい。

ポール・クロードル (1868-1955) は一八九六年中国に着任したフランス外交官である。一九〇九年まで滞在したが、一八九八年に休暇をとり五月二十八日から四週間日本に遊んだ。日光山中の杉に感銘を受け、それを詩に書いているが、神道的雰囲気にあれた体験といえよう。一九二一年には駐日フランス大使として再度日本を訪れる。一九二三年

七月、『日本人の心を訪れる眼』という講演を行ない、日本人が日光の森などでおぼえる、理知には到達し得ない優越者に対する畏敬の念こそが日本人の宗教的態度を示すものだ、と述べ、さらに富士山が日本にとって持つ意味にも触れた。⁽¹³⁾

そして、この国土全体の上に、平野や山々、島々や大洋をみおろして聳え立つ山があります。自然がその「創造主」のために打ち立てた最も壮大なる祭壇のように、あるいは、太陽が人影の見えぬ海上を長い間進んで来た後にいよいよ人間の活躍する舞台の中にその進路をとろうとする、まさにその地点を示すのにふさわしい里程標のように、富士山の巨大な塊が聳えているのです。

そしてその富士山の印象を『百扇帖』では次の詩に書き留めた。

富士

神の玉座のごと

はかりしれぬ高さで

雲の海にはこばれて

われらの方へと進みくる。

クローデルの富士山把握も船で海から横浜港に近づいた人の印象かと思われる。カトリックの詩人クローデルは富士山を創造主のための祭壇と位置づけた。そして別の一詩では白雪をまとった山を「富士、日本の天使は羽衣をまとわせた」とも歌った。クローデルにとっては富士山もまたキリスト教の神を讃える合唱団の一員だった。ハーンとクローデルの二人は富士山が日本人に対してもつ宗教的意味を把握した。その場合、ハーンはキリスト教的偏見から自由であったから日本の霊的な世界に共感しやすかったといえるが、クローデルは仏教はカトリシズムと両立し得ないとしていたが、神道とは共存しうる、という見方をしていたから「富士はキリスト教の神の玉座」という位置づけをしてその存在を讃えたのである。

ところで日本に原子爆弾が落とされた直後、クローデルは「Adieu, Japon」『日本への惜別』という一文をしたため、「フィガロ」紙に寄稿した。この国の現在の没落の責任を軍部に求めたが、そう述べた直後、

しかし、だからといって、冬の夕闇の中からくつきりと浮かび上がる富士山の姿が人間の目に差し示された最も崇高な光景の一つであることには変わりはない。⁽¹⁴⁾

Cela n'empêche pas que la vue du Fuji se découpant
sur un crépuscule d'hiver est un des spectacles les
plus sublimes qui puissent être offerts au regard de l'
homme.⁽¹⁵⁾

と日本に不滅の価値を与えるものとしての富士にやはり言及したのである。クローデルは日本敗戦に先立つ二十数年前、大正の末年の東京時代、やはり冬の夕暮、西の地平線の富士を眺めていたのである。そして昭和二十年、その崇高な景色を思い出して、そこに日本の不滅を認めていたのである。クローデルが思い浮べた富士と、敗戦後の初冬の日に私が眺めた富士とが重なって思い出される。クローデルの感じ方と私ども日本人の感じ方が重なることが有難く嬉しい。クローデルは一九四五年、日本が滅び去ることはないとその廃墟からの復興を信じてくれていたのである。

今日の日本は、漱石が明治末年に述べた予言⁽¹⁶⁾と異なり、日本人が拵えた汽車の方がいまや西洋の汽車より速く走っている。だがその日本人は自分たちの宗教文化については自己卑下しているのか無自覚なのか、語るべきがいたって少ない。新幹線の窓から富士山が見える時、私はいまよりはるある畏敬の念を覚える。産業化の進んだ今だからこそ

日本の精神文化も世界的な視野の中で比較的捉え直してもよいのではないだろうか。

富士山は日本国の永遠や日本人の死生とも関係する霊峰である。祖国の永遠を祈念することもやはり宗教的感情の現われであろう。最後に軍人の歌も添えさせていただく。

紺青の駿河の海に聳えたる紫匂ふ冬晴れの富士

これは海軍航空隊の市丸利之助少将の一首で、市丸の富士讃歌は戦時中に詠まれた。

既にして富士ははるかに遠ざかり機は一文字南の鳥

この歌は昭和十九年八月市丸が木更津基地から硫黄島へ向った時の作で、この歌が市丸が富士を詠んだ第八十三番目の最後の作となった。富士百首はならなかった。市丸司令官は二度と内地に戻らず、硫黄島で玉碎したからである。死を覚悟した軍人は祖国の永遠を祈念して「富士秀で桜花咲く天皇の国」(市丸利之助、正述心緒の歌の下の句)のために戦場に赴いたのである。このような歌に湛えられた美的な感情も、雄雄しい覚悟も、広い意味での宗教的感情の現われではないだろうか。⁽¹⁸⁾

註

- (1) “Shintō, so often spoken of as a religion, is hardly entitled to that name even in the opinion of those who, acting as its official mouthpieces today, desire to maintain it as a patriotic institution. It has no set of dogmas, no sacred book, no moral code[.] Shintō had no root in itself, being a thing too empty and jejune to influence the hearts of men[.]” Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese*, article Shintō, (1890, reprint Yushodo)
- (2) “As compared with the great religions of the world, Shintō, the old *Kami* cult of Japan, is decidedly rudimentary in its character. Its polytheism, the want of a Supreme Deity, the comparative absence of images and of a moral code, its feeble personifications and hesitating grasp of the conception of spirit, the practical non-recognition of a future state, and the general absence of a deep, earnest faith—all stamp it as perhaps the least developed of religions which have an adequate literary record.” William George Aston, *Shintō: The Way of the Gods*, (London: Longmans, 1905) pp.1-11.
- (3) 本居宣長はその種のこちたき道学者風の批判をする限りは人情もわからず文学の楽しみもあり得ないとした。ものあわれの世界は、そのような道学的な倫理的硬直化を排してこそ、正確に感受し得る。そのような見地に立つなら、「道徳規範が比較的欠けている」が、根本に清らかさを求める倫理感情・審美感情のある神道の「未

発達」状況が、逆に評価されないともかぎらない。佐伯彰一『神道のころろ』（日本教文社、一九八九）中の『源氏物語』論にはその種の可能性すら看取される。

- (4) “when you remember that millions of people during thousands of years have worshiped their great dead before such yashiro—that a whole race still believes those buildings tenanted by viewless conscious personalities—you are apt also to reflect how difficult it would be to prove the faith absurd. Nay! in spite of Occidental reluctances,……you may very likely find yourself for a moment forced into the attitude of respect toward possibilities.” Lafcadio Hearn, “A Living God”, *Gleanings in Buddha-Fields*.

- (5) Toda, M., “The Western Approach To Shinto” in Hirakawa ed., *Rediscovering Lafcadio Hearn* (U.K.: Global Oriental, 1997)pp.223-241.

- (6) *Rediscovering Lafcadio Hearn* を国際基督教大学で教えた George Hughes 教授によると、この論集中で主として米国人から成る外国人学生の興味をもっとも引いたのは遠田論文であるという。

- (7) ベルナル・フランク博士が高校生の時、ハーンに惹かれて日本研究に入り、ハーンを評価していることについては、『国文学』学燈社、二〇〇四年十月、「特集Ⅱ 没後百年ラフカディオ・ハーン」号に筆者が紹介した。

- (8) 近年の研究書には Helen Hardacre, *Shinto and the State, 1868-1988* (Princeton University Press, 1989) がある。彼女は第二次世界大戦末期の日本の国家神道なるものを

説明しようとする。

The last days of State Shintō were the years of World War II. During this time Shintō provided indispensable ideological support to imperial Japan. The emperor was called a “divine emperor” (*araitsu mi kami*) or “kami in human form” (*araitogami*). Public school textbooks promoted the idea of the divine origins of the nation and the descent of the emperor and the people from Shintō kami. The idea of the “eight corners of the world under one roof” (*hachō ichiu*) was interpreted to mean that the Japanese were superior people with a mission to rule the entire world. By the war’s midpoint more than 1,200,000 war dead had been enshrined as national kami in the Ysukuni Shrine and there received imperial rites(pp.40-41)

このような記述の日本観にもおそらく三分の理はあるのだろう。しかし誤解もまた少なからず混じっている。「あきつみかみ」も「あらひとがみ」も『万葉集』の昔からいわれてきた美辞的表現で、第二次大戦中に強調されたとはいえ、特別に作られた表現ではない。「八紘一宇」という言葉は私も小学生として習ったが、それが「日本民族が他に優越した全世界を支配する使命を帯びた国民である」ことを意味するなどは戦争中也教わった覚えはまったく無い。「八紘一宇」はむしろ「人類みな兄弟」に近い語感であった。日本がアジアで指導的立場に立つというのは当時のアジアではほかに西洋帝

国主義に拮抗できる独立国がなかった以上、いたってすなおな発想であった。しかしものはい様で、「八紘一宇」の語についてもハーデイカーのような日本批判的な解釈は、戦時中の米国の反日宣伝の決り文句が戦後も生き続けているせいであろうが、*cliche* となっている。なおドイツ語で出版された神道案内ともいふべき書物には Ernst Lokwandt, *Shinto, Eine Einführung* (München: Iudicium Verlag, 2001) があつた。

- (9) 野本寛一「日本人の景観信仰」『文藝春秋「心の時代を生きた 日本人と宗教」二〇〇七年夏季号』pp.52-53。
(10) 井上順孝氏は『神道入門』（平凡社新書、二〇〇六）で神道解釈が論者によって独断的になりやすいこと¹に注意を発しているが、景観信仰を神道の一部と考えることは「神道はそのようなものであつて欲しい」という願望²とは思わない。

- (11) 『日本への冬の旅』『ラフカディオ・ハーン著作集』第一巻（恒文社、1980）pp.456-457。原文は Lafcadio Hearn, *American Miscellanies*, (London: Heinemann, 1924) vol. II, pp.262, 263.

- (12) 『ある保守主義者』、小泉八雲『日本の心』（講談社学術文庫 1990）pp.189, 181.

- (13) 『日本人の心を訪れる目』ポール・クロードル『朝日の中の黒い鳥』（講談社学術文庫、内藤高訳、1988）p.25.

- (14) 『日本への惜別』ポール・クロードル『朝日の中の黒い鳥』（講談社学術文庫 1988）p.228.

- (15) Paul Claudel, 'Adieu, Japon!' (*Œuvre en Prose*, éd. Pléiade (Paris: Gallimard, 1965) p.1152.

- (16) 平川祐弘『漱石の師マードック先生』（講談社学術文庫 1984）pp.118-119.

- (17) 『市丸利之助歌集』は二〇〇六年、郷土佐賀の出門堂から書物の形で世に出た。

- (18) 富士山に日本人の霊性を見たハーンとクロードル——皇學館大學出版部 2006）、平川祐弘『破られた友情——ハーンとチェンバレンの日本理解』（新潮社 1987）pp.152, 215。論文に平川祐弘『ハーンとクロードルが見た「神の国」』、『比較文学研究』第八十五号（すずさわ書店 2005）pp.437がある。内容的に重なる部分が多いことをお断りしておく。

（東京大学名誉教授）